慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	外国経済史に関する新刊書（英書）
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.12 (1927. 12) ,p.1755(143)- 1769(157)
JaLC DOI	10.14991/001.19271201-0143
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19271201-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

複雜且一般的なる場合に於ける經濟的平衡を論じ、以て數學應用に最も重要なる方向を指示せる點に存するものである」と(Ibid., p. 112)。

「天體運行學の進歩がニュートンの原則の重要性を減じないと同樣、經濟學が將來如何に發展するも、ワルラスの創見の重要性は毫も減少しないであらう」(Économie pure, 1902, p. 11)と言つたパレエトの稱讃は姑く措くとするも、マーシャルが「一度其の手を通つたものゝ精神に新しい躍動を與へねば已まぬ」(Principles of Economics, preface of 1st., ed. XI), クールノーに敎へらるゝ所多くして價値理論の論據を mutual causation に置き、偶〻ワルラスと同一結論に到達して居るのは、一般的平衡論の重要性を明示する一證左なりと信ずるものである。(了)

外國經濟史に關する新刊書（英書）

野村兼太郎

近來英米兩國に於いて經濟史に關する書籍の發兌さるゝもの甚だ多く、それ等のすべてを一々閲讀することは殆ど不可能事に屬すると云つてもよいくらゐである。昨年及び本年、即ち一九二六年から二七年にかけて公にされた經濟史に關係ある英文書籍中、余の寓目せるもののみを左に簡單に紹介しようと思ふ。中には精讀したものもあるが、單に通讀したに過ぎないものもある。又從つて同期間内に發刊された全部を網羅し盡したものでもない。殊に出來る限り簡單に要領を得しめやうとしたゝめに、甚だ不十分な紹介に終つてゐる點は許して貰ひたい。しかも敢てこれ等の新刊書を紹介する所以は一方現在の經濟史研究の傾向を窺ふことが出來、又他方この方面の研究に志す初心者に多少とも役立つことが出來るだらうと考へたからである。

J. B. Williams, A Guide to the Printed Materials for English Social and Economic History. 2 vols. pp. 535. pp. 653. Columbia University Press, 1926.

本書は J. T. Shotwell 編纂の Records of Civilization の一部をなすものであるが、一七五〇年から一八五〇年に至る百年間、即ち所謂産業革命時代の英國の經濟史及び社會史の資料を指示したも

のである。あらゆる大事件と等しく產業革命の重要さは今日多少誇張されてゐると云つてよい。事實著者の云ふが如く、「產業中心地ならざる英國の小都會を歩く者は產業革命に基く變化が誇張されてゐると云ふ印象を受けるだらう」。(ibid, p. x) この點より見て著者はかなり廣汎に文獻を蒐錄してゐる。第一編は一般的著作、第二編は特殊問題となし、上卷は第一編と第二編の第一章經濟學說、第二章經濟問題、下卷は第二編の殘部を含む。各節の始めに簡單ながら研究の要領を示したのは親切である。その上この時代の文獻は極めて多い。本書はその三分の一若しくは四分の一であると云ふに拘らず、かく尨大なる大冊二卷を形成するに至つた。然し撰擇的であるとは云へ、英國經濟史中最も興味あるこの時代の書史の存在は吾人外國の研究者にとつて頗る便利である。又書史を作る上に最も困難なるこの時代のものを編纂された作者の勞を多とすべきである。

Ogg and Sharp, The Economic Development of Modern Europe, pp. 861. New York, 1926.

この書の初版(一九一七)は早くからよく知られてゐるもので敢て云々する必要はないが、今度訂正增補されたので特に紹介する。全體として前版よりも約二百頁の增加を見、主として大戰後の問題を附加してゐる。即ち新しく附加された章は Population, Food Production and Agrarian Reform since 1914; Industry and Oceanic Shipping in War Time; Industrial and Commercial Recovery since 1918; Labour Economics during the Past Decade; Labour Movements and Social Politics; Some War and Post-War Problems in Public Finance の六章である。經濟的事件の雜然たる收錄たることは前版と變りがない。

Margaret S. Miller, The Economic Development of Russia, from 1905-1914, pp. 311. London, 1916.

（本誌第二十卷第十號新刊紹介を見よ）

R. H. Snape, English Monastic Finances in the Later Middle Ages. pp. 190. Cambridge, 1926.

（本誌第二十卷第九號新刊紹介を見よ）

H. B. Morse, The Chronicles of the East India Company trading to China, 1635-1834. Vol. I. pp. 305; Vol. II. pp. 435; Vol. III. pp. 388; Vol. IV. pp. 427. Oxford, 1926.

The Currency of China, The Gilds of China, The Trade and Administration of China 殊に名著として許されてゐる The International Relations of Chinese Empire の著者として著名なる支那研究者 Morse の最近の勞作である。英國東印度會社の支那に於ける活動、嚴密に云へば倫敦と廣東との貿易發達の年代史的記錄である。第一卷は一七七四年まで、第二卷は一八〇四年まで、第三卷は一八二〇年まで、第四卷は一八三四年まで、全部約二世紀間の商業的、政治的、經濟的、又社會的記錄をも含む。この勞多き述作は吾人直接原資料を檢討する機會を有せざる者にとつては頗る有益である。勿論著者が政治的方面に多く興味を有してゐるがために、その方面の記事が多いのは止むを得ない。然し英國の東洋方面に於ける經濟的活動を知る上に於いて甚だ有用なものである。恐らく印度局編史官たる Sir William Foster の編纂する The English Factories in India 1665-7 (1925) 等と共に、この方面の研究に缺くべからざる文獻の一つであらう。本誌本年十月號の拙稿「第十七世紀前半に於ける英國東印度會社の狀態」中 Courteen's Association の部分は本書の記述に從つたもので

ある。

C. F. Remer, The Foreign Trade of China. pp. 269. Shanghai, 1926.

簡單に要領よく近世の支那貿易の發達を敍述したものである。序文にも斷つてあるやうに敎科書として使用するのに相應しい。支那の外國貿易が微々として奮はない原因を支那國民の passive resistance にありとし、支那は今や產業革命をなしつゝあり、今日の複雜錯綜せる事實は將來の變化を期待し得ると云ふ結論は誰人も大體に於いて首肯するところであらう。全篇を通じて前揭 Morse の諸著に依るところ頗る多い。

A. F. Newton, (ed.) Travel and Travellers of the Middle Ages. pp. 223. London, 1926.

倫敦の King's College の歷史地理科の一九二五年に於ける秋季公開講演を集めたものである。その中で商業史上特に一讀を要するものは IV. The Viking Age by Alan Marner. V. Arabs Travellers and Merchants, A. D. 1000-1500, by T. W. Arnold. VI. Trade and Communication in Eastern Europe, A. D. 800-1200, by A. F. Meyendorff. VII. The Opening of the Land Routes to Cathay by Eileen Power. X The Search for the Sea Route to India by Edgar Prestage. 等である。然し Power を除いて他は委く經濟史家ではないから、記述上物足りなく感ずるところもあるが、中世史の中でも特に興味多い題目であり、又專門家でないだけ却つて暗示せるゝことが多い。

L. F. Salzman, England in Tudor Times, pp. 138. London, 1926.

English Industries of the Middle Ages（その一部は本誌第二十卷第七號に高木壽一氏の紹介がある）の著者が Tudor 王朝下の英國社會生活及び產業を概括的に描寫ぜんとしたものである。學問上の考證論究を目的とせず、寧ろ全體として當時の狀態を興味多く描かんと意圖したものである。Tudor 王朝の精神、地方生活、都會生活、家庭生活、敎會、海陸に於ける冒險の六章に分かち、數多の挿畫を以つて敍述を助けてゐる。好箇の讀物であらう。

G. G. Coulton, The Medieval Village. pp. 603. Cambridge, 1926.

英國中世社會史の研究者として最も權威ある著者が中世村落の狀態を歐洲各國、殊に英佛獨に就いて比較研究したものである。元來この種の研究は著者自身も認めてゐるやうに、甚だ困難なものである。著者の目的が「現在存在しない又は大部分なくなつてしまつた中世村落生活の特徵を力說せんとするにあり」、「違つた時代、違つた場所に於ける人間生活を比較することは甚だ困難なことであるが、その比較なくば、明かに又は暗に、社會史は何も吾人に敎ゆることが出來なくなる。」「一國內の地方地方に就いてさへ大なる相違が存してゐた。」「然しこれ等すべての相違の中にも一般的發展法則が存在したやうに思ふ。」「中世初期の隸農は明かに奴隸以上ではあつたが自由民以下であつた。」然し「主として彼等自身の努力及び經濟的變化の助力に依つて、隸農は自由に向つて努力した。」かくの如き著者の意圖はその仕事の困難にも拘らず、甚だ成功したと云つてよいであらう。元來本書の要領は Wales の University College に於ける講義であつたゞけ、一般に概括的ではある。然し著者は本文を補ふために、本文三百九十五頁に對して百七十五頁の附錄を附してゐる。讀者はその本文に於いて中世歐洲村落生活の概念を描くことを得ると共に、ある特殊の問題に就いては附

錄を利用することが出來る。

M. Rostovtzeff, The Social and Economic History of the Roman Empire, pp. 695., Oxford, 1926.

政治狀態、社會狀態、經濟狀態がそれぞれ密接なる關係あることは云ふまでもない。然しそれ等の相互關係を明確に表現することは甚だ困難な業である。Cunningham がマヽカンチリズム時代の政治と經濟との關係を、その博洽なる知識を以つて描寫したことはよく人の知るところであらう。今本書の著者 Rostovtzeff はマヽカンチリズムの時代よりも、資料文獻遙かに少なく、研究極めて困難な羅馬帝政時代に就いて、社會狀態と經濟狀態との變遷を研究し、その相互關係を明かにせんと企てたのが本書である。最初の時期に於いて大地主及び實務家階級の沒落は、經濟的方面に於いて古共和政時代の特質たる封建的資本主義（評者は資本主義の意義をかく廣汎に使用することには贊成し得ない）の崩解となり、資本の集積は農工商の急激の發達を生じ、都市生活が全帝國を通じて隆盛となつた。然るに都市の bourgeoisie は有閑階級となり、單に安全なる定收入あることのみを希望するやうになつた。又都市中流階級の著しい經濟的活動は下層階級の搾取となつた。かゝる社會生活の經濟上の弱點は又都市資本主義の頽廢及び第三世紀に於ける經濟恐慌を生じ、國家資本主義の發成を促がし、寧ろ原始的經濟形式の復活を見るに至つた。即ち以上 Augustus から Constantine I. に至る變遷を叙述し、その纏まつてゐる點に於いて我々羅馬史に關しあまり親しくない者にとつても比較的容易に理解し得る。專門的研究者に對しては後に委しい Notes を附し、その後の研究に便利を與へてゐる。又數多の寫眞を挿入したことはあるひは著者にとつて必要不可缺のものであるかも知れないが、讀者にとつては寧ろ興味あるものとして、又あまり親しくない當時の記述を多少とも補助する以上のものとは考へられない。さらに上述の如く大體に於いて明確ではあるが、論述の間に政治的記述の少くないことが、止むを得ないことではあらうが、多少混雜を來たしてゐる。

P. Dawson, Germany's Industrial Revival., pp. 276, London, 1926.

歐洲大戰中並びに大戰後の交戰列國の經濟狀態に關する述作は甚だ多い。本書もその一つである。著者は英國々會の議員であり、普佛戰爭當時 Düsseldorf に滯在し、その初期の教育は獨逸で受けた。始めから獨逸が產業上英國の恐るべき强敵たることを知り、以前から屢々これを公言してゐたゞけ、全體に獨逸の恐るべきを强調し過ぎてゐるやうである。然し著者の云ふが如く、獨逸人の組織能力の優秀なること、又最近に於ける產業統制の發展せることが大戰後の獨逸產業の復活を急促ならしめてゐることは明かである。著者はこれ等及び生產費の安價なることを英國の狀態と一々比較してゐる。第一章一八七〇年より一九一四年に至る戰前の獨逸政策の章を除いて、他は悉く戰後の狀態に就いて述べてゐる。これ等の大部分は一度諸雜誌に揭載されたものである。獨逸の國家中心の產業政策がその商敵たる英國政治家の目に如何に映じたかを見る上に興味多いものである。それと共に又最近世經濟史の一資料となすことが出來よう。

G. Renard and G. Weulersse, Life and Work in Modern Europe, fifteenth to eighteenth century, pp. 395, London, 1926.

產業革命の研究者又勞働運動の研究者として原著者 Renard は著名である。英譯されたる本書の

原名は何と云ふか淺學にして知らないが、少くとも氏の最も得意とする部分である。最初に Introduction として當時に於ける大體の變遷及びその理由を述べてゐる。産業革命と共に、又それ以前に三つの大革命あることを指摘し、それに依つて如何に歐洲諸國が大なる變化を受けたかを明かにしてゐる。三つの革命とは政治的革命、精神的革命（Renaissance と Reformation）、地理的革命である。次いで各論に入り、最初に西班牙葡萄牙、續いて和蘭、英國、佛蘭西、伊太利、瑞西、獨逸及び墺太利匈牙利、スカンヂナビア諸國、波蘭と露西亞の順序に、それぞれ農工商の發達を論じてゐる。最後にかくの如き近世初期の發達の特徴を論じ、封建時代の遺物、國民經濟の成立、資本主義の發展、經濟的階級の發生、政府の干渉を擧げ、主要なる國家の發展を述べ、今日の社會經濟に至る前提の時期として次ぎのやうに述べ結語としてゐる。「新時代が起らんとしてゐた。商業を世界的たらしめ、資本の巨大なる集積を齎らしめ、機械の甚しき發展が勞働狀態を變革し、又暫くして多數の勞働者を不安の地位に置き、新しく得た自由を蔑視するに至つた時代である。この經濟的及び社會的革命はそれが惹起した騷擾とそれが必要とした干渉と共に、政治的革命と同じく現代の特質である。」余一個の私の事情ではあるが、先年公刊した拙著「近世商業史」に於いて略〻同時代を取扱つた經驗上から、特に本書から敎へらるゝところ大であつた。中に挿入された數葉の寫眞は何れも珍しいものである。恐らく經濟史中特に興味ある部分として、一般讀者と雖も相當面白く讀めること〻思ふ。

C. K. Ogden 編纂の The History of Civilization の一冊子である。書き落したが前に紹介した Travel and Travellers of the Middle Ages もこの一冊である。本叢書が多くの有用なる著述を續々出版しつゝあることは多とすべきであらう。

Melvin M. Knight, Economic History of Europe to the End of the Middle Ages. pp. 260, New York, 1926.

本書の序文に云ふ如く、從來合衆國の經濟史界の研究の對象となつたものはその直接の先驅者たる英國の經濟史であつた。然るに漸次に歐洲大陸の研究に移つるやうになつた。本書は第一章を歐羅巴經濟生活の基礎と題し、文明の起源に筆を起し、埃及、アラビアの文明より希臘まで述べ、第二章に羅馬の經濟生活を論じ、第三章以下四章を中世にあて、發明時代。即ち産業革命前まで記載してゐる。かくの如き小冊子にかく廣汎なる時期と範圍とに及んでゐるのであるから、記述の粗雜なるは當然である。殊に民族大移動の部分の如き甚だ不十分である。中世の部分は歐洲一般の經濟史としてあらゆる點に於いて Rudolf Kötzschke の Allgemeine Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters (1924)に遠く及ばず、又 Max Weber の Wirtschaftsgeschichte (1923)の暗示的なるにも及ばない。唯英文で書かれたものとしては Cunningham の Western Civilization ほど學問的ではないが、それよりも纒まつた比較的均衡を得た述作である。あるひは敎科書などゝしては適當かも知れない。

T. G. Williams, The History of Commerce, pp. 333, London, 1926.

Main Currents of Social and Industrial Changes 1870-1924 を前年に公にした著者は續いて本書を刊行した。純然たる敎科書的のものではあるが、從來のものより遙かに興味多く一讀し得る。恐らく所々に他の Authority から興味ある一節を適度に引用してゐるからであらう。云ふまでもないが古

代から歐洲大戰以後の狀態にまで及んでゐる。又かうした概括的商業史に普通であるやうに、國際貿易を主としてゐるが、近世期の一般產業組織の變遷に多くの紙數を割いてゐるのは敎科用として甚だ適當なことであらう。

Dorothy Marshall, The English Poor in the Eighteenth Century, pp 292, London, 1926.

從來存在してゐた如何なる社會組織に於いても最も重大なる問題の一つは救貧問題である。英國の法律中幾度も改正された法制の一つは救貧法である。今著者が問題としてゐる第十八世紀は恐らく救貧法の歷史中最も興味ある時代であらう。何故ならば貧乏に對する一般の輿論が將に變らんとしつゝあつた時代であるからである。即ち貧乏を以つて貧乏人自身の怠慢過失であるとしてゐた輿論が漸次貧乏人に利益ある方向に轉ぜんとしてゐた。この時代の狀態並びにその救濟政策の變遷及びそれ等の關係を著者は詳細に且つ要領よく論じてゐる。余の知れる限りに於いてはこの時代の英國救貧法の實際的變遷の本質を知る上に最良の著述である。第一章に當時の輿論の救貧問題に對する態度を述べ、第二章に救貧の中心者たりし各敎區(Parish)の行政及財政狀態を調べ、(著者はこの時代の敎區の救貧の歷史は貧乏に對する敎區の道德的責任と財政的責任との永い爭鬪の歷史と見てゐる。)——事實又この見地は正しいものであると思ふ。)第三章にその成功せる部分を、第四章にその貧乏人雇用の失敗を記し、第五章に法律の敎區的行政が貧民狀態に及ぼせる結果を記し、最後に第六章に於いて Act of Settlements の失敗を以つて終結とし、古救貧法の終末を明かにしてゐる。これ等過去に於ける苦い經驗を知ることは恐らく著者の云ふが如く、現代の改革者にとつて好箇の指針であらう。

W. W. Jennings, History of Economic Progress in the United States, pp. 819, New York, 1926.

著者が序文に於いて經濟史の意義を論じ、史家が如何なる時代の歷史をも適當に解釋せんと欲するならば經濟學的訓練を必要とすると云つてゐるのは正しい。然し本書に現れたる著者の史觀は極めて淺薄である。例へば新大陸の發見の動機は政治的、宗敎的、社會的、經濟的なりとするが如きは、普通の表面的解釋以上に出でない。これ等の表面的解釋は獨立戰爭、南北戰爭の原因を論ずる場合と雖も同樣である。吾人は著者に對しさらに一步進んでそれ等の根本原因を特に鮮明せんことを希望するものである。然し著者が各篇(第一篇植民時代、第二篇政治及び商業獨立時代、第三篇發展時代、第四篇內亂及び復活時代、第五篇第二十世紀)の始めにその時代の人口問題、勞働又は移民問題を論じたのはこれ等の問題を以つて他の經濟現象の根底と考へたのであらう。勿論新しい見地でもないが、當を得たものであらう。その後著者はそれぞれの時代の農業、工業、商業等の經濟的分岐に就いて各別に述べてゐる。最近に於ける合衆國の驚くべき發展を著者はその豐富なる自然の富に歸してゐるが、かくの如き發展の經過を各方面に就いて知るのには本書は有用である。唯その經濟的發展全體の綜合的判斷と求めんとする者は蓋し失望を感ずるであらう。

J. H. Clapham, An Economic History of Modern Britain, The Early Railway Age 1820-1850, pp. 623., Cambridge, 1926.

近世英國經濟史の述作は決して少なくない。その獨自の存在理由を認むべきものを、思出すまゝ

に掲げるゐ Cunningham, Growth of English Industry and Commerce, Modern Time; Page, Commerce and Industry, 1815-1914; Knowles, Industrial and Commercial Revolutions in Great Britain during the Nineteenth Century; Fay, Life and Labour in the Nineteenth Century. 等がある。その外この時代の研究は甚だ多く、且つその資料極めて多い。Dr. Clapham の著作はその獨特な質實な研究に依り、確かにこの時代の研究に一つの大なる貢獻をなすものである。著者は先に The Economic Development of France and Germany, 1815-1914. を著はし、すでにその資料の取扱方や説明の方法に於いて特殊の技倆を示してゐるが、本書に於いても全く同樣の方法を用ひてゐる。唯前者よりも資料の多いためか、多少煩雜と思はるゝところもあるが、多くの報告書や著述等から最も適當な例を引用して來る所は全く敬服すべきものであり、又吾人に豫期せざる知識を供給して呉れる。全篇の構造は前著と類似してゐる。即ち第一篇は鐵道時代直前の大英國となし、先づ第一章に於いて當時に於ける經濟狀態を概觀し、第二章に人口、第三章に交通、第四章農業組織、第五章工業組織、第六章商業組織、第七章貨幣、銀行、保險及び特種商業機關。第八章國家の經濟的活動を以つて終りとしてゐる。第二篇は初期鐵道時代で先づ劈頭第九章に鐵道と鐵道政策を論じ、第十章鐵、石炭、蒸氣及び機關、第十一章農業、第十二章海外貿易と商業政策、第十三章銀行業、物價及び金融市場、第十四章大英工業國に於ける生活及び勞働狀態に分かちそれぞれ詳論してゐる。經濟史の純粹の意味から見て、かくの如き分類的記述方法には異論があると思ふ。又時に一般讀者をして殊に著者の華美ならざる叙述法は一層退屈を感じさせる恐があらう。然し吾人は本書から得らるゝ確實なる知識に依つて鐵道發達期の前後を比較する時、多くの興味を感ずるであらう。これ必ずしも余自身が恰も本書の述作中に直接氏の指導を受けた個人的理由から生ずるものゝみではあるまい。鋭敏なる讀者が本書から受ける利益は蓋し少なくはないであらう。

Allan McPhee, The Economic Revolution in British West Africa, pp. 322, London, 1926.

英國植民地の發展の研究は從來英國に於いても何れかと云へば閑却されてゐた。L. Knowles の The Economic Development of the Britisch Overseas Empire (1924) はそれ等に就いて概括的知識を供給して呉れる。然しかく方面の發展の個々の研究は將來の開拓を待つべきものであらう。本書は英領西部阿弗利加に就いて述べてゐる。本書に依ればこの地方の歴史は(一)奴隷貿易時代(二)貿易發展時代(三)内地發展時代に分かつことを得、又その四地方 Gambia, Sieera Leone, the Gold Coast, Nigeria のそれぞれに依り多少異なれる經濟的事情が存在すると云ふことである。然し本書は本來に於いて歴史的研究を目的とするものではなく、最近に於ける顯著なる經濟的發展を貿易、運輸、土地、財政、金融、土人、保健等に就いて明瞭ならしめんとするものである。然しなほ英帝國植民地發展史に相應の資料を供給して呉れる。殊にその貿易の一章は近世初期の商業史にとつて甚だ有用である。

M. E. Seebohm, The Evolution of the English Farm, pp. 376, London, 1927.

英國農業の發展をその歴史以前の狀態から第十九世紀に至るまで述べたものではあるが、主としてその技術的方面を平面的に記述したに過ぎない。如何なる家屋に住み、如何なる道具を使用し、

如何なる耕作方法を行ひ、如何なる家畜を飼育し、又如何なる日常生活を送つてゐたかを知らんとする者には相當役に立つと思ふ。殊に多くの挿畫を以つてその理解を助けてゐる。然し農民の社會的地位、農業と他の產業との關係、農業發展の意義を知らんと欲して本書を繙く者は失望を免れないであらう。又比較的古代に委しく、近世に粗であるから、實際的にも役に立つこと甚だ少ないであらう。唯多少とも農業に興味を持ち、その發展の經過を知らんとする者には好箇の讀物であらう。殊にその叙述は平易に且つ興味多く記されてある。

Stella Kramer, The English Craft Gilds, Studies in their Progress and Decline, pp. 228, Columbia University Press, 1927.

一九〇五年にその學位論文たる "The English Craft Gilds and the Government" を公刊した著者はその後の研究に依つてこれを大成し、本書の公刊を見るに至つた。本書は三つの研究から成る。即ち "The Amalgamation of the English Trades and Handicrafts" "The Conflict between the Trades and Handicrafts." 及び "End of the English Craft Gilds." である。即ち工匠組合の初期、發展期、終末を叙述し、大體一貫してその歷史を明かにすることになる。その研究態度の質實なることは最も推賞すべきものである。著者のこれ等の組織に對する觀察はよくその變遷の必然性を明かにしてゐる。即ち商人ギルドとの合同に就いてギルド發展の過程に於ける自然的階梯なりとした著者はその兩者の衝突に就いて次ぎの如く述べてゐる。「廣い見地より見れば、從來その經濟的組成に於ける最初から調べて來た英國商業と手工業との衝突の原因は云はゞ商業の保護、自由の二つの相反する經濟原則の衝突であると思はれる。それ等が中世英國の經濟生活に作用したものである。」從つてその衰頽も時代の大勢と見做し、「多くの者は時代の徵候を知るに賢明であり、彼等の特權のあるもの、時にはそのすべてをも放棄し、かくて不柔順なる仲間をも强制し、以つて運命の下に默從した。」かく全體の傾向を自然の運行と見たゝめに生じたものとも思はれるが、種々なる原因又は動機を單に列擧し、例へばギルド組織崩壞の原因の如き、それぞれに就いてその重要の程度を示してゐないから、卒然これを讀む者には何れが最大なる原因であるか容易に知り得ない恨みがある。然し恐らく本書はクラフト・ギルドに關し最も有用なる文獻の一つであらう。この方面の研究者の必讀を要するものである。

（昭和二年十一月十五日稿）